

保育所における1歳児の他者とのかかわりの芽生え —保育士に自分を見てもらうための行為に着目して—

名和 孝浩* 鈴木 裕子**

*大学院学生

**幼児教育講座

The Beginnings of 1-Year Old Children's Relationships with Others —Attention-Seeking Actions to Gain Attention of the Nursery Teacher—

Takahiro NAWA* and Yuko SUZUKI**

**Graduate Student, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*

***Department of Early Childhood Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*

We conducted participant observation at a nursery center to examine the following: (1) attention seeking behavior of 1-year-old children to seek attention of their nursery teachers, and (2) their intentions about what they want the teacher to see. STUDY 1: We observed nineteen 1-year old children to study the actions they performed to seek attention, and to determine the frequency of such actions. As a result, we identified 34 types of actions and categorized them as follows: (1) “looking” actions for making eye contact with nursery teachers; (2) “approaching” actions that shorten the physical distance from teachers; (3) “showing” actions to make nursery teachers see the situation the child is in; and (4) “intentional facial expression.” STUDY 2: We objectively observed six 1-year old children to determine the children's intentions while performing each of the above mentioned action categories. The following were recognized as the intentions to seek the nursery teachers' attention: (1) Children “look” so that the teacher notices their presence. (2) Children “look” so that the teacher notices the situation they are in. (3) Children “approach” to create a situation in which they can be seen. (4) Children “show” to make the teacher notice the situation that they want the teacher to see as well as notice their presence (if the “situation” that the child wants the teacher to see is occurring between him/her and the teacher). (5) Children “show” to make the teacher notice the situation and to make the teacher see/view the situation along with him/her (if the “situation” is occurring in front of the child and the teacher). (6) Children “make facial expressions” to make the teacher better understand how they feel.

1. 問題の所在と目的

1-1. 1歳児保育のニーズの高まりと課題

1960年代以降、主に都市部で働く女性が増加し、保育所において、乳児からの保育が求められるようになった。その後、1989年には合計特殊出生率が1.57となり、少子化社会が本格化したことによって、母親が子どもを産み育てやすい社会を作るための政策の一つとして、乳児からの保育の整備が進められた。2012年度の待機児童数は、3歳未満児が全体の81.4%にあたり、特に1、2歳児がそのほとんどを占めており¹、乳児からの保育の利用率は今後さらに高まり続けると考

えられる。

保育所における乳児からの保育の実践において、保育者は、集団の中で一人ひとりの子どもの気持ちを理解して対応し、ゆったりと接することを大切にしており、子どもと保育者の一対一の関係をつくることを重要視している²。しかし、本研究で対象としようとする1歳児保育では、保育士配置の最低基準が1:6とされ、保育士人数の面からも一対一のかかわりがもちにくい。1歳児保育の難しさについて、古賀³は「1歳児の特質を踏まえた援助への志向と構造上の実現困難との間のジレンマ」と報告している。その相容れないジレンマが、保育士にとって、自らの保育が不十分で

あるという保育不全感をもたらし、過剰にネガティブな自己評価へと至らしめている。保育士の力量を必要とする1歳児保育にとっての深刻な課題である。

1-2. 1歳児保育の特質

では、1歳児保育の特質とは何か。保育士に求められる力量とは何か。他者への興味・関心が芽生える1歳児を対象とした保育では、保育士は、他者との関係性の育ちを集団の中で見通すために、子どもの行動の意味を考え、読み取ることが力量のポイントとして挙げられる⁴。特に、ことばが主体にならない1歳児の行為をどのように受け止めたらいいか、何を訴え、何を求めているかがつかめず、困難を抱えているという声も聞かれる。その背景には、人間関係の基礎が1歳児のときに形成されるという認識から、保育士が丁寧にかかわることで、子どもの他者とのかかわりを芽生えさせ、豊かに育むことができるようになるという保育士の使命感がある。

しかしながら、近年急速に高まったニーズに、乳児からの保育の方法論は追いついていない。これまで乳児期の他者とのかかわりの芽生えについては、乳児期における接触行動や、養育する身近な大人との相互行為などによって既に始まっているとされ⁵、特に母子間の愛着関係に関心が注がれてきた。しかし、保育所における実践場面に焦点を当てた研究は充分ではない。各々の保育士が手探りで保育にあたっているのが現状と言える。1歳児保育をはじめとした乳児からの保育のニーズが高まる現代において、保育の質を充実させるためにも、他者とのかかわりを育むための支援の視点や方法を検討することは急務であり、保育所における実践場面での研究が求められている。

1-3. 研究目的

そこで本研究では、1歳児の他者とのかかわりの育ちの支援方法を検討するための手がかりとして、保育所において、身近な大人に身振りなどで意思や欲求を伝えることが多い1歳児⁶が、どのような方略で保育士とのかかわりを開始しようとするかを検討する。特に、一対一の間を重視している保育において、子どもが、自ら保育士との一対一のかかわりに入るために、どのような行為を発現させているのか、そこには、どのような自分を見てほしいという意図があるのかを明らかにしたい。

鯨岡⁷は、子どもが承認や称賛を求めるために保育士に向けて「先生、みて」や「みてて」ということばについて、集団に埋もれている個が保育士の注意を自分に向けて、一対一のコミュニケーション関係に入るための常套手段であるとしている。これを受けて、福岡⁸、中島⁹は、1歳児から5歳児までの「自分を見てもらう」ために他者の注目を誘う「みて」や「みてて」

という発話を、「みてて」発話とし、その発話によって、さまざまな思いや意図を保育者に効果的にアピールしていることを、保育場面での観察から報告している。しかし、中島の研究では、保育所の1・2歳児を対象としているが、1歳児の「みてて」発話の頻度は、2歳児に比べて著しく少ない。1歳児は、ことばで表現するよりも、自分の意思や気持ちを行為で表すことが多く、それに応答することで、子どものかかわる意欲や、保育者との関係が築かれる¹⁰。したがって、1歳児は、発話よりも身体的な行為に着目することで、一対一で自分を見てもらうためのかかわりが捉えられると考えられる。

そこで本研究では、自分を見てもらおうとするかかわりは、発話以前にも始まっていると考え、1歳児が保育士に「自分を見てもらう」ための方略と考えられる身体的な行為に着目することとした。

2. 研究方法

本研究では、参与観察によって事例を収集し、分析、考察する方法を用いる。【研究Ⅰ】では、保育士が感じる1歳児の自分を見てもらうためのかかわりが、どのような場面で、どのような行為で行われるかを明らかにするために、自分を見てもらうための行為の種類と頻度を調査する。

次に、その結果を基に【研究Ⅱ】では、保育士とのかかわりにおける、1歳児が自分を見てもらうための行為の意図について考察する。

2-1. 【研究Ⅰ】の方法

1) 事例収集

保育士が感じる1歳児の自分を見てもらうためのかかわりが、どのような場面・行為によって行われているのか。1歳児クラスでの参与観察によって得た記録を基に、対象児と保育士とのかかわりの事例を抽出した。記録は、可能な範囲で観察中に行い、観察終了後さらに記録を加えた。

2) 観察期間

岐阜 A 市内の私立保育所で、2010年10月27日～2011年3月25日までの期間の、午前8時半前後から11時半前後の、登園後から主活動の時間で、2週間に3回程度の割合で参与観察を行った。

3) 観察対象

1歳児クラス(1歳児19名、保育士5名)を対象とし、より多くの場面を見ていけるよう、クラス全体を観察した。

4) 分析

文脈の中で自分を見てもらうための行為を分析するため、収集した事例を、C1(case1):直前の行為、C2:自分を見てもらうための行為と保育士の行為、C3:そ

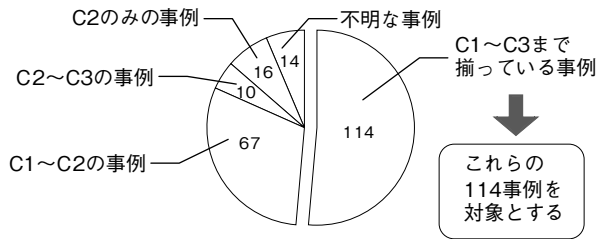


図1 抽出した事例と対象とした事例

の後の行為に区分し、C1～C3が観察し記述できた114事例を対象とした(図1)。事例別に、どのような行為で行われているかを分類し、自分を見てもらうための行為が重複して行われた場合も、そこに何らかの意図があるとし、その両方を検討した。

2-2. 【研究Ⅱ】の方法

1) 事例収集

保育士とのかかわりに至るまでの経緯とそのやりとりを詳細に記述するため、自分を見てもらうための行為の事前から事後の行為までを含めて、参与観察によって記録した。保育士の意図、対象児をより綿密に捉えていくため、発達や特徴などについては、保育士にインフォーマルなインタビューを行い、補足した。

2) 観察期間

岐阜県A市内の私立保育所で2011年5月2日～2011年6月20日までの期間で、午前8時半前後から10時前後の、登園後から自由遊びの時間で、週に1度参与観察を行った。

3) 観察対象

0, 1歳児混合クラス(0歳児4名, 1歳児18名, 保育士5名)のうち、1歳児6名, 1歳児クラス担当の保育士3名と参与観察の立場をとった筆者を含む4名を対象とした。

1歳児クラスは、大まかな月齢順で3つのグループに分かれており、グループごとに活動時間、内容、場所が異なる場合がある。行為の事前から事後を含んだ詳細な事例を抽出するために、1つのグループに絞って観察をした。対象としたグループは、観察期間中、グループ内のすべての1歳児が、満2歳に達しないため、よりことば以外の行為が抽出できると考えられた。なお、観察開始時の対象児の月齢は、1歳2か月～1歳8か月である。

また、3つのグループは、全ての活動が異なるわけではなく、複数のグループが一緒に過ごす場合もある。そのため、それぞれ担当以外の保育士にかかわる場合もあることから、対象とする保育士は、1歳児クラス担当の保育士3名とした。

4) 分析

詳細な事例を収集するためにC1:直前の行為、C2:自分を見てもらうための行為と保育士の行為、C3:そ

の後の行為の場面に分けて観察し、記述できた28事例を対象とし、C1～C3の3つの場面に分けて考察した。なお、事例中の対象児の名前はすべて仮名とした。

4. 結果と考察

4-1. 【研究Ⅰ】自分を見てもらうための行為の種類と頻度

1歳児が、保育士に自分を見てもらうための行為を、同一もしくは類似する行為ごとに分類し、その種類と頻度を示した(表1)。自分を見てもらうための行為は、34種類に分類された。なお、本研究では、言語を用いず自分を見てもらおうとした行為に限定するため、自分を見てもらう際に、「みて」などの発話を伴っている事例は対象から省き、喃語に関しては、あえて行為として検出しないことにした。次いで、1歳児が保育士に自分を見てもらうための34種類の行為を、4つのカテゴリー「見る」「寄る」「示す」「表情をつくる」に分類した(表1)。

表1 自分を見てもらうための行為の種類と頻度

カテゴリー	自分を見てもらうための行為	頻度
見る	保育士を見る	89
	保育士と目を合わせる	7
	保育士に視線を向ける	2
	保育士を見上げる	1
	保育士の方に振り向く	15
	保育士の方を向く	4
寄る	近寄る	38
	駆け寄る	2
	膝に座る	2
	隣に来る	1
	追いかける	1
	向かってくる	1
	手招き	1
	体を揺らす	1
	手を振る	1
	示す	差し出す
見せる		6
自分が持っているモノを見る		3
モノを持ってくる		2
保育士にモノをくっつける		1
保育士にモノを近づける		1
口の中を見せる		1
保育士の膝にモノを置く		1
モノを触って音を出す		1
モノを叩く		1
指さし		8
保育士に指さしをさせる		2
保育士の腕をモノに近付ける		1
他児に手を伸ばす		1
保育士のモノを見る		1
他児のモノを見る	2	
他児を見る	1	
表情をつくる	笑顔になる	1
	困った顔をする	1

1) 見る

「見る」は、主に自分を見てもらいたい相手を見る行

為で、その後のかわりに移るために、互いに相手を見るアイコンタクトを成立させるための行為である¹¹と捉えられたものを分類した。

2) 寄る

コミュニケーションが成り立つには、働きかける子どもと応答する大人の距離が重要であり¹²、本研究においても、保育士と身体的に近接する事自体に意味があると考え、保育士に近寄ることを指示する手招きも含め、1歳児が自ら保育士との距離を縮める行為を「寄る」として分類した。

3) 示す

「示す」は「見せたい状況(モノ、人)」を、自分を見てもらいたい相手に知らせる行為として分類した。「指さし」は、指、あるいは手を媒介として別の何かを人に示す行為であり、指さしと類似の「差し出す」、手に持ったモノを「見せる」などの提示の行為は¹³、自分が注意を向けている対象を相手に知らせる手段である¹⁴。身振りの場合は内容が大切でそれを表現する型は一定しない¹⁵ため、文脈の中で保育士に自分の見せたい状況を示す行為と受け取れた「玩具を触って音を出す」「物を叩く」などもここに含めた。

4) 表情をつくる

顔に表出される表情もまた、他者へ自分の感情を伝える重要なツールの一つであるが¹⁶、自分を見てもらうための行為に限定するために、事象の発生後、保育士とのやりとりの中で意識的に変化させている場合だけを対象とした。

4-2. 【研究Ⅱ】各行為の意図と特徴

本節では、【研究Ⅱ】において収集された28事例から、代表的な事例を基に、【研究Ⅰ】で明らかになった、自分を見てもらうための行為の、カテゴリーごとの、主とした意図と特徴について述べる。なお、本節で使用する図について、大円は保育士、小円は1歳児とする。

4-2-1) 見る:見てもらいたい相手を見ることで見せたい状況を見てもらう

見る:保育士を見る
事例2-1「見せて、ペットボトル持てるよ」(2011.5.16):ユミ(女兒)(1歳8か月時)
ユミは、ペットボトルを2つ抱えて立とうとするが、「ドンッ」という大きな音を立てて、ペットボトルが2つとも落ちてしまう。ユミは、ペットボトルが落ちた音に目を開き、立ちかけた体勢のまま肩が一瞬上がり、驚いたような表情になる。すぐにしゃがんだユミは、足元に転がる2つのペットボトルを見つめる。すると、ユミは①しゃがんだまま顔を上げて保育士の方を見る。じっくりと保育士を見て目を合わせると、視線を床に戻し、しゃがんだま

ま、ペットボトルを1つ、片手で抱える。今度は、倒れているもう1つのペットボトルを起こして、脇に抱える。その格好のまま、再び②顔を上げて保育士を見る。保育士は、この時もユミを見続けている。ユミが、ペットボトルの方に視線を戻し、勢いよく立ち上がる。ペットボトルを2つとも抱えられたユミは、すぐに口を横に大きく広げて、笑顔になる。顔を上げて笑顔のまま保育士の方を見る。保育士が、「ユミちゃん、持てたねえ。すごい」と言葉をかけるとユミは「へへ」と笑う。笑った直後に、ペットボトルは音を立てて2つとも落ちるが、ユミは体をこわばらせることもなく、ペットボトルも拾わない。笑顔を保ったまま、足を軽やかに上げるようにして、再び部屋を歩き始める。

ユミは、2つのペットボトルを持とうとしたが、落としてしまう。ペットボトルが落ちた音に、肩を上げて驚いたが、もう一度持とうとしたところで①のように保育士を見た。ユミが視線を向けたことに気付いて、保育士もユミを見返す。ユミが、保育士と目を合わせたまましばらく動かなかったのは、保育士がユミを見ていることを確認していたように感じた。子どもは大人の目を見て、その相手が返すまなざしを待っており、視線を共有することによって人との意志交流を始める¹⁷。また、そのように視線を共有し、「見る・見られる関係」にある対象がかかわり手となる¹⁸。ユミは、保育士を見ることで明らかに見返されることを待っており、見返されることで、「見る・見られる関係」を保育士との間に成立させ、かかわり手の対象にした。この構造を、図2のように表した。図のような、見てもらいたい相手に、自分の視線に気付いて見返してもらう場合の「見る」行為には、保育士の視線を自分に向けさせ、「自分の存在に気付いてもらう」意図があったと言える。

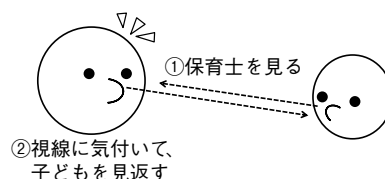


図2 自分の存在に気付いてもらうために相手を見る場合

また、ユミはペットボトルを持ち上げる時にも、②のように、保育士を見る。乳児と大人とのコミュニケーション関係は「見る・見られる関係」によって始まるが、かかわっている間、乳児は、大人が自分のことを見ているかどうか敏感であり、「見る・見られる関係」を維持することでコミュニケーションを行う¹⁹。ユミが、一度自分から視線を外した後、②のように保育士を見たことは、保育士がユミのことを見続けているかの確認であり、これからすることを見てほしいという思いも含まれるのではないだろうか。実際

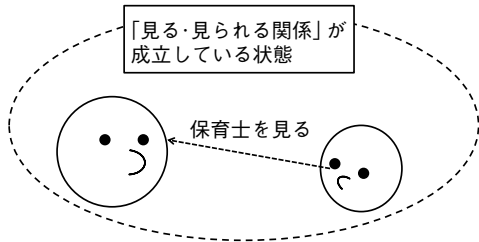


図3 見てもらいたい相手を見ることで見せたい状況に気付いてもらう場合

に、ユミはペットボトルを抱えて立ち上がり、保育士を見ながら笑顔になったことから、これがユミの見せたかった状況だと解釈できる。

ユミは、「見る・見られる関係」が保育士との間に成り立っている状態で、再び保育士を見ることによって、ペットボトルを持つに至るまでを、保育士に見てもらえた。この構造を図3に示す。図3のような「見る」行為には、「見せたい状況に気付いてもらう」という意図があると捉えられた。

また、ユミがペットボトルを抱えたまま、笑顔で保育士を見ることで、喜んでいると感じた保育士は、「すごい」と賞賛の言葉をかけており、ユミと気持ちを共有したように捉えられる。互いの目が合うことはコミュニケーションしているという実感をもたせる²⁰ため、ことばがないからこそ、視線を合わせることは、相手の思いを感じるために重要な行為だと考えられる。

4-2-1) 寄る：自分自身を見てもらうために近寄る

見る：保育士を見る

寄る：近寄る

事例2-2「見て、積み木はけたよ!」(2011.5.2)：サヤカ(女児)(1歳8か月時)

サヤカは、登園後、部屋をぐるりと一周歩いて、保育士から少し離れたところに座る。そこにある輪っかの積み木を掴むと、輪っかの部分をつま先に合わせ、足に積み木を通し始める。積み木は足の甲まで通る大きさで、甲まで来るとサヤカはぐっとかかたの方に押しこむように力を入れる。積み木から手を離して、座ったまま思い切りよく両足をぱたつかせても、積み木は足から外れることなくぴたりとはまっている。サヤカは片足を上げて積み木を見上げると微笑む。サヤカは、足を降ろして積み木を叩くように触ると①顔だけを上げて前方にいる保育士を見る。保育士と目線が合うと、そのまま視線を外すことなく立ち上がり、積み木を履いた足を引きずりながら②保育士の目の前まで近寄ってくる。③保育士を見ながら、唇を口の中にしまっただけで微笑み、服を両手で触ってもじもじと体を揺する。それまでのサヤカの行為を見ていた保育士が「積み木の靴、履いてるみたいだね」と言葉をかける。サヤ

カは口を開いて笑いながら、保育士を見ながら足を踏み鳴らすと、振り向き、部屋の端まで歩いて行った後で、積み木を足から外す。他児が遊んでいる様子をきょろきょろと見つめると、機嫌よさそうに別の玩具で遊び始める。

積み木を足に通したサヤカが、保育士と視線を合わせることで①、事例2-1と同様に、保育士の視線を自分の方に向けさせており、「自分の存在に気付いてもらう」意図があったと捉えられる。次に、②のように近寄った後、③で示したように、保育士の目の前に立って見つめる、という行為に留まっている。保育士に対して、他の具体的な行為が見られなかったことから、この行為のみで自分の「見せたい状況」が何か伝えようとしていると考えられる。この事例においても「見る」という行為に、「見せたい状況に気付いてもらう」ための意図があったと捉えることができる。

「見る」の事例との違いは、「見せたい状況」を伝えようと思ったサヤカが、保育士に近寄ってきたという点である。サヤカが最初に保育士を見たとき、保育士はサヤカと少し離れた距離にいた。福崎^{21,22}、中島^{23,24}の「みてて」発話の研究では、離れた場所にいる保育者に向かって叫ぶことで、見てもらいたい相手と離れた状態でも、自分を見てもらう事例が観察されているが、本研究ではそのような事例は観察できなかった。ことば以外のコミュニケーションが成り立つ構造特徴の一つに、相手と身体的に距離が近いことが挙げられ²⁵、発話が伴わない場合、遠くにいる相手には、視線が合いにくい、見てもらいたい状況が何なのか伝わりにくいなど、自分を見てもらうために不都合があるのかもしれない。そこでサヤカは、保育士の目の前まで近寄っている。これは、図4で表されるように、近寄ることで、見てもらいたい相手の視線を独占し、自分自身を見てもらえる確かな状態をつくっている、と考えられる。

「寄る」という行為には、発話がなくても、自分自身を「見てもらえる状態をつくる」意図があったと捉えられる。その後のサヤカの笑顔や、機嫌のよい様子から、自分を見てもらえ、認められたことに喜んでいることが伝わる。

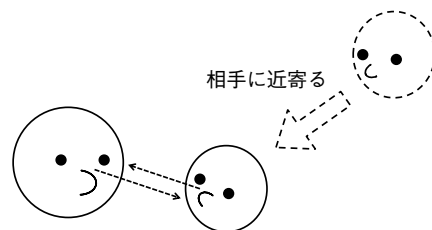


図4 相手に近寄ることで自分を見てもらう場合

4-2-1) 示す

「示す」という行為には、保育士と向かい合う場合と、保育士と横並びで示す場合が見られた。やまだ²⁶は差し出すなどの「やりとり機能」をもった対面関係を「提示の関係」、指さしなどによる共同注意機能を「並ぶ関係」としており、他者が自分と同じ場所に立つ「並ぶもの」なのか、自分の「顧客」なのかで、〔私〕と〔他者〕との位置関係が違っているという。「示す」という行為の意図は、事例2-3を「保育士と向かい合う場合」、事例2-4を「保育士と横並びで示す場合」として、2つの側面から考察する。

a) 示す：見てもらいたい相手と向かい合って「見せたい状況」を示す

見る：保育士を見る 示す：差し出す
事例2-3「積み木が取れなくなっちゃった」 (2011.5.9)：ユウタ（男児）（1歳2か月時）
ユウタは保育士の傍に座り、ガムテープの芯にフェルトを巻いてある、輪っかの積み木で遊び始める。その輪っかの中に、別の輪っかの積み木を入れようとするが、同じ形なので中々入らない。積み木を床において、上から押しつぶすと、ガムテープの芯で作ってあるため、輪に入れる方の積み木の形が楕円形に変わり、何とかはまる。ユウタは嬉しそうに微笑んで積み木を見た後、積み木の両側を掴んで2つの積み木を外そうとする。しかし、力いっぱい引っ張っているが外れる様子はない。次第に眉間に皺が寄り、困っているような表情になっていく。しばらく続けた後、ため息をつき、力が抜けて肩が落ちると、①視線を上げて傍にいる保育士を見つめる。ユウタは②保育士に向けて取れなくなっている積み木を差し出す。保育士が「取れなくなっちゃったね。貸してごらん」と言っ、手を差し出すと、ユウタは、積み木を保育士に手渡す。積み木を外して、「ほら、取れたよ」と言いながらユウタに近付くと、ユウタは笑顔になり、手を伸ばして積み木を受け取る。ユウタは、笑顔で外れた積み木をいろいろな角度から見た後、積み木を腕に通し始める。腕を上挙げて肩口の方まで積み木を通すと、今度は別の保育士の傍まで歩いていき、そこに座って腕から積み木を出し入れしながら遊んでいる。

ユウタは、カズキが遊んでいた積み木を見て、同じもので遊びを始める。輪になっている積み木同士を力いっぱいはめ込み、それを自分で外そうとするがなかなか外れない。その後、ユウタが眉間に皺を寄せ、ため息をついて肩を落とす仕草から、積み木が外れないことに落ち込んでいるのがわかる。ここで①のように、ユウタは保育士を見てから、②保育士と向かい合って

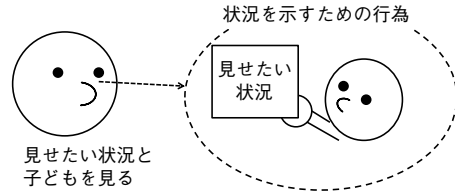


図5 見てもらいたい相手と向かい合って見せたい状況を示す場合

積み木を差し出している。この際、積み木ではなく、保育士を見ていることで、保育士は、ユウタから積み木を受け取りながらも、それを持つユウタにも、同時に視線を向けている。中島²⁷は1・2歳児の提示的な「みてて」発話に対して、「自分の見せたいモノ」を見てもらうことで、「見せたい自分」も同時に見てもらおうとした。提示的な行為は、自分でできないことを、人に差し出してやってもらうための、要求実現の手段となることも多い²⁸。ユウタが「自分では外せなかった積み木」を差し出す行為は、図5のように、積み木と自分を同時に見てもらうことで、「積み木が外れなくて困っている自分」を保育士に示していると考えられる。その後、保育士が積み木を外すと、笑顔になって積み木を受け取っていることから、ユウタの要求が実現したと言え、最初に保育士を見ることで「自分の存在に気付いてもらう」ことを契機に、積み木が取れない状況を解決しようとしたと解釈できる。また、「積み木を直す」という応答をした保育士は、積み木を差し出されたことで、向かい合ってユウタを見ることになったからこそ、ユウタの気持ちを受け取れたように感じられた。

見てもらいたい相手と向かい合って、見せたい状況を「示す」行為は、「見せたい状況に気付いてもらい、同時に自分も見てもらいたい」という意図があると捉えられた。

b) 示す：見てもらいたい相手と共に「見せたい状況」を見る

見る：保育士を見上げる 示す：指さし 見る：保育士を見る
事例2-4「見て、ブロック見つけたよ」(2011.05.16)： ケンタ（男児）（1歳10か月時）
ケンタは、井型ブロックが置いてある絨毯に座ると、ブロックに視線を落とす。ブロックを1つずつ手に取り、角度を変えて眺めることを、何個か繰り返す。ケンタの隣でブロックを組み合わせていたマサノリが、ふと、すでに2つ組み合わさったブロックに視線を向ける。マサノリがそのブロックに近付こうとするので、保育士もつられて、ブロックの方に動く。ケンタもその2人が動いた方へ視線

を向けると、組み合わせあったブロックを見つけ、座ったまま「あっ」と声を上げ、①保育士の方に顔を上げる。口を縦に大きく開き、目を見開いて、保育士の顔を見たま、②腕をまっすぐ伸ばして組み合わせられているブロックを指さす。保育士がケンタの指さす方を見ると、ケンタの視線も指をさしているブロックへと移動する。保育士が、ケンタの方に体を寄せて「つながるとるブロックあったね。あれで遊ぶ？」と笑いかけると、ケンタは保育士を見て、口を閉じたまま、深く頷きながら「うんっ」と歯切れの良い返事をする。ケンタはブロックに視線を向け直し、「だった〜」と言うと、③一度、保育士の方に首だけ振り返って視線を向け、目が合うと、また2つ組のブロックと、その周りに散乱するブロックを見ている。すぐに身を少し前のめりにして、そのブロックを手を持って、別のブロックとつなげ始める。時折、ブロックがつながると、「あん」と声を出して頷く。6つの井型ブロックを、横一列に床に並べてつなげ、「だった」と保育士を見て頷いた後で、「ブーブー」と言いながらそのブロックを前後に動かしていく。

自分の興味が出るブロックを探すような素振りのケンタは、マサノリの視線の動きにつられて、組み合わせられているブロックを見つけた。ケンタは、思わず「あっ」と声を上げ、①のように顔を上げて、傍にいる保育士を見る。保育士と目が合うとすぐに、②のようにブロックを指さしている。

やまだ²⁹は、子どもが指さしをする際の視線について、子どもが乳母車に乗っていて、母親が後ろにいるときは、抱かれているときよりも、母親の顔を見ることが多かったと述べている。これは、自分を見ているかわからない相手に、自分を注目してもらうための行為と考えられる。よって、①の「見る」行為も「自分の存在に気付いてもらう」ことで、相手と「見る・見られる関係」を作っていると考えられる。また、指さしは自分が注意を向ける対象を、自分と他者のお互いの中で確認するための行為であり³⁰、自分ひとりで見ただけでなく、「見て、見て」と他者にも呼びかけて見せようとするはたらきがある³¹。この事例では、保育士を「見る」ことで、誰に見てもらいたいかを伝えながら、「指さし」によって自分が見つけたブロックを見てもらおうとしている。図6で表されるように、保育士がブロックを見ると、ケンタもブロックに視線を向け、二人が横並びで同じ状況を見る構図になった。図のように、ケンタと保育士が同じ場所から、同じブロックを見ることで、ケンタがそのブロックに、どのような思いをもっているかを、保育士が感じられたと捉えられる。そのため、「つながっているブロックで遊びたい」というケンタの気持ちを代弁でき、ケンタも

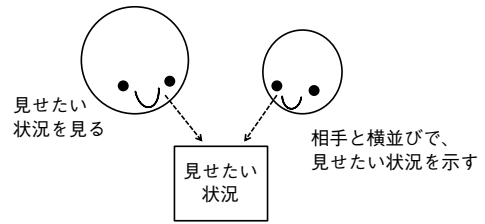


図6 見てもらいたい相手と共に見せたい状況を見る場合

それに頷いている。

見てもらいたい相手と共に見せたい状況を見るための「示す」行為には、「見せたい状況に気付いてもらい、それを一緒に見てもらいたい」という意図があると捉えられた。

また、ケンタはその後、③のように保育士を見ることで、引き続き「見る・見られる関係」を継続させ、積極的に自分を見てもらおうとしたと解釈された。

4) 表情をつくる：意識的に表情をつくることで自分の気持ちを伝える

見る : 保育士の方に振り向く
表情をつくる : 笑顔になる

事例2-5「積み木が飛んでった」(2011.6.6):キョウコ(女児)(1歳6か月時)

キョウコは、輪になっている積み木の1つを手に取り、肘のあたりまで通すと、次の積み木を手に取り、また腕に通していく。手首が隠れるまで積み木を通すと、自分の左手を真っ直ぐに伸ばし、少し高く上げて、積み木を見上げるようにしながら、口を横に広げて笑っている。すると、勢いよく①保育士の方に振り向き、無表情で見つめる。しばらくの間、無言でじっと保育士の方を見ており、保育士もキョウコから視線を外さないでいると、②突然歯を見せて笑い、いたずらそうな笑顔を作って、積み木の通っている左手を高く上げ、思い切り上下に振り回す。腕に通っている積み木は、勢いよく前や後ろへ飛んでいき、保育士を見続けながら、腕から積み木がなくなるまで腕を振っている。積み木がなくなると、「ボン」と手を広げておかしそうに笑っている。保育士が「いっぱい飛んでったね」と笑いかけると、笑顔で「うん、うん」と頷いて、反対側に振り向く。辺りを見回して視線が止まると、その方向へ走ってペットボトルを取りに行く。ペットボトルを両手で振って中に入っている色水やビーズが動いているのを見つめている。

キョウコは、積み木をいくつも腕に通してから、①のように保育士の方に振り向いて見ることで、「自分の存在に気付いてもらう」ことができたことと捉えられた。その後、②のように唐突に笑顔を作り積み木を飛ばした。キョウコがしたような「おもちゃを投げる」という

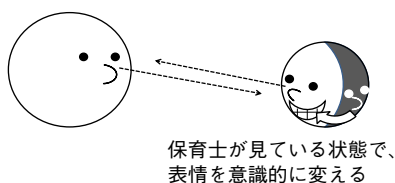


図7 意識的に表情をつくることで気持ちを伝える場合

行為は、否定的に受け取られやすい行為である。そうした、やってはいけない行為をするときの笑顔には、親和的関係を前面に出すことで、自分の行為を正当化させる役割がある³²。キョウコは普段から活発で、危ないことや、いたずらをして叱られることもある。そのため、今までの経験から「おもちゃを投げる」ことはやってはいけない行為であり、叱られることも充分予想できたと考えられる。しかし、「やってはいけない行為をやりたい」という気持ちを抑えられなかったキョウコは、笑顔をつくることで叱られることを回避しつつ、自分の見せたい状況を、保育士に見てもらおうとしたと考えられる。保育士は、キョウコがあえて「おもちゃを投げる」ことをしたと感じたため、行為の注意は避け、「いっぱい飛んでったね」と応答したと捉えられる。キョウコの「うん、うん」という頷きと笑顔には、キョウコの「わかってもらえた」という思いが込められているように感じた。

このような「表情をつくる」行為は、図7のように、自分を見てもらっている状態から、意識的に表情を変えた行為であり、「より自分の気持ちをわかってもらう」ことを意図していると捉えられた。

「表情」の事例は、常に表れている表情を検出したのではなく、自分を見てもらうための意図をもった行為に限定するため、見てもらいたい相手に対して、意識的に表情を変化させて表していると思われる場合のみに絞って検出した。あえて表情を変化させることはそもそも1歳児では数が少なく³³、本研究でも、【研究Ⅰ】では2事例、【研究Ⅱ】では1事例のみの抽出となった。1歳児のことは以外のコミュニケーションにおいて、表情は、情動とのかかわりも示唆される重要な視点と考えられる。今後さらに多くの事例から、自分を見てもらうための行為における表情をどう捉えていくかは、今後の課題である。

5. まとめ

本研究では、発話の充分でない1歳児が、自ら保育士との一対一の関係になり、保育士に「自分を見てもらう」ために、どのような身体的な行為でかわるか、どのような意図があるかを考察した。

1歳児は、身体的な行為で「自分を見てもらう」ため、「見る」「寄る」「示す」「表情をつくる」の4つのカテゴリーの行為で、保育士にアピールしていること

が分かった。また、「見る」には、「自分の存在に気付いてもらう」という意図と、「見せたい状況に気付いてもらう」という意図が認められた。「寄る」には、「見てもらえる状態をつくる」という意図が認められた。「示す」には、見せたい状況を相手との間に挟む場合は、「見せたい状況に気付いてもらい、同時に自分も見てもらいたい」、また、横並びで同じ状況を見る場合は、「見せたい状況に気付いてもらい、それを一緒に見てもらいたい」という意図があった。「表情をつくる」には、「より自分の気持ちをわかってもらう」という意図が認められた。

以下では、この結果を基に、1歳児保育の実践への示唆を述べる。「保育士を見る」など、その行為は何気ないもので、発話に比べれば気付きにくいものである。そのため、保育士が、自分を見てもらうための行為に気付いていけるよう、子どもに目を向ける必要がある。また、自分を見てもらうための行為に、保育士が応答しなければ、かかわりは成り立たない。1歳児の何気ない身体的な行為に意味があることを意識し、子どもに目を向け、それを読み取ろうとすることが求められる。

しかしながら冒頭で述べたように、保育士の配置人数という問題からも、保育士一人では1歳児の行為に気付けない場面もある。行為に気付いてもらえない時は、別の保育士に見てもらおうとするなど、自分のことを見てもらうために、1歳児なりに工夫していると思われる事例もみられた。このように、保育士が一人担任ではないことが、意味を持つと考えられる場面も見られ、1歳児クラスにおける複数担任制の意義も示唆された。

1歳児の、身体的な表現をどのように捉えていくか、保育士間の連携の在り方などを含めて検討することが、今後の課題である。

引用文献

- 厚生労働省 (2012) 保育所関連状況取りまとめ
- 阿部和子 (1999) 乳児保育再考Ⅰ—乳児保育に対する保育者の意識から—。聖徳大学研究紀要短期大学部。第32号。55-61
- 古賀松香 (2011) 1歳児保育の難しさとは何か。保育学研究。第49巻第3号。8-19
- 大方美香 (2009) 乳児保育における保育の計画。大阪総合保育大学紀要。第4号。129-144
- 内田信子編 (2006) 発達心理学キーワード。有斐閣。25-32
- 厚生労働省編 (2008) 保育所保育指針解説書。40-42
- 鯨岡峻 (1998) 両義性の発達心理学。ミネルヴァ書房。213-214
- 福岡淳子 (2002) 「みてて」発話からとらえる幼児の他者意識—見せたい相手はだれか—。保育学研究。第40巻第1号。83-90
- 中島寿子 (2005) 子どもが他者に見せたい自分についての考察—保育所1・2歳児クラスにおける加観察から。保育学研

- 究. 第43巻第2号. 21-33
- ¹⁰ 宮原英種・宮原和子 (2002) 応答的保育の研究. ナカニシヤ出版. 56-58
- ¹¹ 長崎勤 (1993) 健常児とダウン症乳児における相互的注視行為の発達—追隨注視による共同注視とアイコンタクトの成立過程の分析を通して—. 教育心理学研究. 第41巻第2号. 161-170
- ¹² 鯨岡峻 (1990) コミュニケーションの成立と課程における大人の役割—乳児・母親および障害児・関与者のあいだにみられる原初的コミュニケーション関係の構造—. 島根大学教育学部紀要 (人文・社会科学). 第24巻第1号. 47-60
- ¹³ やまだようこ (1987) ことばの前のことば ことばが生まれるすじみち1. 新曜社. 82-140
- ¹⁴ 村上太郎・大神英裕 (2007) 乳幼児期の社会的認知の発達—共同注意・言語・社会的情動を指標に—. 九州大学心理学研究. 第8巻. 133-142
- ¹⁵ 前掲13. 118
- ¹⁶ 前掲14. 133-142
- ¹⁷ 上野ひろ美 (1995) 発達の「場」をつくる—まなざしで向かい合う保育—. 高文堂. 27-31
- ¹⁸ 天野幸子 (2009) 乳児のコミュニケーション要求, 共同注視, そして共同のかかわり. 女子栄養大学. Vol 40. 31-37
- ¹⁹ 同上. 31-37
- ²⁰ 麻生武 (1992) 身ぶりからことばへ 赤ちゃんにみる私たちの起源. 新曜社. 109-115
- ²¹ 前掲8. 83-90
- ²² 福崎淳子 (2004) 幼児の「みてて」発話における内容の質的分析—共同注意請求発話としての機能の多様化—. 児童研究. 83巻. 97-104
- ²³ 中島寿子 (2004) 子どもの提示的呼びかけについての—考察—保育所1・2歳児クラスにおける参加観察から—. 西南女学院短期大学研究紀要第50号. 29-41
- ²⁴ 中島寿子 (2005) 子どもの提示的呼びかけについての—考察(2)—保育所1・2歳児クラスにおける参加観察から—. 西南女学院大学紀要 Vol 9. 206-215
- ²⁵ 前掲12. 47-60
- ²⁶ 前掲13. 139-15
- ²⁷ 前掲9. 21-33
- ²⁸ 前掲13. 142
- ²⁹ 同上. 93-94
- ³⁰ 前掲20. 325-331
- ³¹ 前掲13. 139
- ³² 友定啓子 (1993) 幼児の笑いと発達. 勁草書房. 154-156
- ³³ 同上. 154-156

また, 本稿の一部を, 日本保育学会第65回大会で発表した。

(2013年9月25日受理)

謝辞

本研究の参与観察にあたり, 御協力いただいた保育所の先生方と子どもたちに, 心より感謝申し上げます。

付記

本稿は, 2011年度に独立行政法人大学評価・学位授与機構へ提出した学修成果論文を, 加筆修正したものである。